朝日新聞 DIALOG 「声の力」プロジェクト
日本の未来を語ろう

企画・制作 朝日新聞社メディアビジネス局 広告特集

声は自分の可能性を広げる

POWER of VOICE

温かい声、若々しい声、真面目そうな声。私たちは、「声」から多くの情報を受けとっている。もしも声をもっと上手に使い、正しく聞くことができれば、私たちの世界はもっと広がっていくのかもしれない――。視覚障害を持つ高校生たちに声の力を教えてくれたのは、アニメ、映画、バラエティーなどで大活躍中の一流声優のみなさん。ユニークなプロジェクトの軌跡を紹介します。

特別授業

筑波大学附属視覚特別支援学校 〈講師〉古川登志夫さん

「みなさん、僕が想像していたよりはるかに勉強してきましたね」。生徒たちとの2回目の顔合わせ、古川さんは感心した様子でそう語った。前回終了時、自作の台本とともに「メリハリをつけて表情豊かな演技プランを考えてくること」という課題を与えていたのだ。ある人はゆっくり、ある人は少し早口で。心のこもった演技に古川さんが目を細める。「大切なのはその人のオリジナルな表現。それぞれ違っていいんです」

授業の終わり、充実した表情の生徒たちに古川さんが贈ったのは「人格等身大表現」という言葉だ。「演技力はその人の人格と等身大であるという意味です。うまくなりたければ人格を磨いてください」。それは将来広い世界へと歩んでいく彼らへの、温かなエールでもある。

岐阜県立岐阜盲学校 〈講師〉水田わさびさん

台本に沿って2人1組で言葉を交わす場面、水田さんは話すよりも聴くことのほうが大切だと生徒たちに説明する。「のび太くんの言葉を聴く前に私がドラえもんの話し方を決めていたら、その演技はウソになります」。実際に聴くことを意識すると、思わず引き込まれる迫真の演技に。水田さんも「鳥肌立った！ めちゃくちゃよかった！」と絶賛するほどだった。別れ際、「またみんなに会いたいです」と語った水田さん。生徒たちも心からそう感じていた。

広島県立広島中央特別支援学校 〈講師〉岩田光央さん

生徒たちは戸惑いの表情を浮かべた。声の授業の初めに指示されたのが「歩く」ことだったからだ。岩田さんが手をたたいたら、すぐにそちらを振り返る。「どこに向かって歩いているのか、なぜ振り返ったのか、自分で考えることが大切です。つまり役者は、セリフの意図や目的を考えることが仕事なんだよ」。岩田さんはそれを「日常生活の再生」と表現する。演じることの奥深さと面白さ。テクニックよりも大切なことを教わった1日だった。

愛媛県立松山盲学校 〈講師〉山口由里子さん

みんなで輪になり、課題の詩を1行ずつ読んでいく生徒たちに山口さんがいう。「1行を人に伝えるというのは大変なことなんです」。もっと全身を使って。もっと作者の思いを感じて。与えられたテーマを意識しながら回を重ねるうち、生徒たちの朗読はみるみる上達していく。「みんないろんな声が出せましたね。声は人を喜ばせることも傷つけることもできます。だから自分の声を大切にしてください」。その教えは生徒たちの心に刻まれたはずだ。

ラジオドラマ制作合宿&収録

〈講師〉磯部弘さん

各地で続けられてきた声の授業の集大成として、高校生たちがラジオドラマを制作し実際に放送する。そこに参加したのは、筑波大学附属視覚特別支援学校の生徒5人と、今回が初参加の筑波大学附属高校の5人。障害のある人とない人が互いを理解し声の演技を磨き上げるため、収録前に2日間の合宿が行われた。

初日、講師を務めた磯部さんが全員の声を聞いたうえで配役を決定。両校の混成チーム二つができあがった。「このセリフは自分の大好物の味や香りを思い出しながら」。「ただ読むのではなく、声を相手に投げかける気持ちで」。磯部さんの指導を受け、生徒たちの演技がみるみる変わる。その吸収力と感性の鋭さには磯部さんも驚いたようだ。空き時間には一緒に遊びに出かけて楽しいひとときも過ごした高校生たちは、収録が終わる頃には互いにかけがえのない友人同士となっていた。

完成したドラマが放送されたのは、古川登志夫さんが司会を務める番組内。完成版を初めて耳にしたゲストの高校生たちは、やや照れながらも誇らしげな表情を浮かべた。プロジェクトの終了を見届けた古川さんはいう。「最初はレッスンをどうやろうかと悩みましたが、始まったらすべてがうまくいきました。生徒たちの素直な表現には、私たちも教わることが多かったです」。声がいかに多くの情報を届けるか。いかに細やかな感情を伝えるか。ひたむきな高校生たちの姿が、そのことをあらためて教えてくれた。

「声の力」プロジェクトとは

「声の力」は、視覚障害のある高校生たちが、声による表現方法を学ぶことで、自身の可能性を広げることを目指すシリーズ企画。プロの声優が各地の視覚特別支援学校で特別授業を行い、レッスンを重ねた受講生がラジオドラマの制作を経験しました。

障害者による文化芸術活動推進事業
(文化芸術による共生社会の推進を含む)
主催：文化庁、朝日新聞社
協力：株式会社青二プロダクション／青二塾、
株式会社主婦の友インフォス(『月刊声優グランプリ』)

収録を終えて 授業を行った講師の声

(左から)岩田光央さん、山口由里子さん、古川登志夫さん、水田わさびさん、磯部弘さん

古川登志夫さん
「人格等身大表現」という言葉を最後に贈らせていただきましたが、人格という言葉の本質は、他者に思いを致すということです。演技の上手な声優さんは人格も魅力的です。生徒たちには、そのことを覚えていてもらえたらと思います。

水田わさびさん
みんな感覚が鋭くて、聴く力がすごくいい。「どこでもドア」があったら毎日でも会いに行きたいぐらいです。すごく積極的に取り組んでくれたのもうれしかった。みんなの将来が本当に楽しみです。

岩田光央さん
もともと僕は自分の声にコンプレックスがありましたが、自分に使えるものはこれだけなので、それを生かす努力をしました。生徒たちはみんな素晴らしい個性を持っています。与えられた環境でどれだけ自分を生かせるかを大切にしてほしいです。

山口由里子さん
読む・話すというのは、声を使って自分の「言葉」を相手の「心」に届けることです。朗読を通して体験したように、たった1行にも気持ちを込めることはできます。声で何を伝えるか、それはみなさんの心次第です。

磯部弘さん
言葉は心から出てくるものだから、声は心を伝え、それが広がって人と人とをつないでいきます。授業でも何度か話しましたが、頭で考えるより感じていこう。「心からの言葉」でいきましょう。

収録を終えて 参加した生徒の声

筑波大学附属視覚特別支援学校 隅本真理さん
視覚に障害がある私たちにとって、声は重要な情報ツール。その声を使って誰かに思いを届ける楽しさや難しさを学ぶことができて感謝しています。

筑波大学附属視覚特別支援学校 田中紫音さん
「大切なのは発音ではなく心だ」という磯部先生のアドバイスが印象に残っています。附属高の人たちはみんな親切で、学校のことや生活のこと、いろいろ話せて良い経験になりました。

筑波大学附属高等学校 永田みのりさん
障害のある人をどうサポートするのがいいのか、支援学校のみなさんに教えてもらい勉強になりました。この機会を通じてお互いの理解が深まったと思います。

筑波大学附属高等学校 金久保柚葉さん
練習をすればするほど自分たちのレベルが上がっていくのが楽しかったです。障害のあるなしでコミュニケーションが制限されるようなこともなく、みんなで楽しく過ごせました。

心を声で伝える力を育てよう

『声優グランプリ』編集長 **廣島順二さん**

現在の声優の仕事はアニメや外国映画での声の演技だけにとどまらず、歌手活動や舞台出演、ラジオパーソナリティなど、多岐にわたっています。我々は声優専門誌として、そんな様々な活躍を日々追いかけていますが、マルチな活動ができるのは、声優の本質が「心を声で伝えるプロフェッショナル」であるからこそだと思います。

今回のプロジェクトに協力させていただいて、声の表現で自分の感情を上手に伝えることの大切さを改めて実感することができました。障害の有無にかかわらず、その力を身に付ければ、普段の生活が彩りを増し、自分の世界を広げることにもつながるはずです。この有意義なプロジェクトが続いていくことを期待しています。

声優・古川登志夫さんによる特別授業の動画はこちら

この紙面の内容は、朝日新聞DIALOGでご覧になれます。
http://www.asahi.com/dialog/voice-power/

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan